

アメリカ英語の多様性 から見えること

住吉 誠 教授 (英語学)

2年ほど前から、アメリカ英語の方言と変異について詳細に記述した Walt Wolfram, Natalie Schilling (著) *American English: Dialects and Variation* (3rd edition) の翻訳企画に携わった（この翻訳は、『変わりゆくアメリカ英語－方言と変異をめぐる12章（上）（下）』（田村幸誠・住吉誠・南佑亮・中嶋浩貴・松浦幸祐（訳））として2024年9月に開拓社より出版された）。この企画は、アメリカ英語の方言の豊かさと変異の多様性について学ぶ貴重な機会となった。我々は英語を学習する時、「均一で等質な英語」というものが存在すると思いがちであるが、いわゆる「標準英語」というのは理想化された英語の姿であって、個々の話者が実際に使用しているのは英語に多数存在する方言変種のひとつでしかない。理想化された標準英語の習得を英語学習の目的とすることは当然であろうが、一方で、「この言い方は誤り」「この表現は使わない」といった、〇×式の教育に慣れてしまうと、英語の多様性やその後ろに隠れている人間の多様性を見失ったり、（結果的に）否定してしまったりする危険性があることも十分に認識しておかねばならないだろう。

紙幅が限られているので詳しいことは翻訳書にゆずるが、アメリカの地域方言は、大きく4つ（北部、中部、南部、西部）に分けることができる（さらに細分化も可能であるが、ここでは置いておく）。この地域方言の大きなくくりは、アメリカが経験してきた歴史的事象と深いつながりを持っている。アメリカ英語の特徴としてよく言われるものに、母音の後の r の発音（例：car や park の r を発音する）がある。当時のイギリス南東部でもこの r は発音されるのが一般的であった。17世紀にアメリカ東北部にわたってきたイギリス南東部からの移民たちは、この発音とともにアメリカにやってきた。つまり、17世紀のイギリス英語の特徴がアメリカへ持ち込まれたことになる。その後イギリスではこの母音の後の r を発音しなくなっていくが、アメリカでは西への領土拡大とともに広がっていく。その結果、母音の後の r の発音について、現在よく知られているアメリカ英語とイギリス英語の相違として認識されるようになったのである。興味深いことに、アメリカ入植後もイギリスと密な交流が残っていたアメリカ北部の一部の地域では、今も母音の後の r を発音しない。その地域では、r を発音しなくなったイギリス英語の影響を受けたのである。すなわち、母音の後の r を発音するかどうかという問題を考えることは、人の移動と交流という観点から人間の歴史の足跡を考えることでもあるのである。

南部の方言では、I might could do it. といったような助動詞を重複させる形が一般的に使われる。我々が学習する「英語」の常識からは逸脱しているが、この might could はその方言話者にとっては「正しい」英語なのである。この英語を外国語として英語を学習する我々がまねる必要はないが、それぞれの「正しさ」があることは十分に理解しておく必要がある。

また現在、アメリカ北部では母音の発音が変化する「北部都市母音推移」という現象が広まっているのが観察されている。調査すると、新しい発音を取り入れることで既存の価値体系に挑戦しようとする精神をもった社会階層集団の存在が確認されるという。標準的ではない発音は、体制への反発という、ある種の人間らしさの反映であり、それは単に「正しい」「誤っている」というものの見方ではとらえきれない深い問題なのである。

聖書では、人間の言語の多様性は神をも恐れぬ人間がバベルの塔を建設しようとし、神の怒りを買った結果であるとしている。言語の多様性が生じる理由は何か。人間ははるか昔から考えてきた。アメリカ英語に観察される多様性は、アメリカがたどった歴史とそれを紡いできた人々の社会の姿の反映である。アメリカ英語のありようは、人間のありようなのである。そのような考えで英語を学習すれば、単に試験問題の解答が○か×かということではなく、人間というものを深く考える、意義深い機会になるのではないかと思う。
